

〔平成二五年度哲学会春季大会 講演要旨〕

「諸行無常」から見るインド仏教思想史

酒井真道

諸行無常説は釈尊が説いた教えの一つとされるもので、現象世界の一切は無常——必ず滅びるもの——である、という説である。この説は、三法印や四法印の中に必ず組み込まれているものであり、一般的には仏説の中の仏説と理解されている。しかし、インド仏教の思想史における、この諸行無常説の一生は波乱万丈なものであった。この諸行無常説の生涯に注目し、初期から後期までのインド仏教思想史を概観する作業は——この教説が、あまりにも「非宗教的」であるがゆえに——我々が仏教という宗教の核心に迫る上で有効な手続きであると言える。

初期仏教の段階では、諸行無常説は、数多くある釈尊の教説の核心と見なされていた。すなわち部派仏教の三蔵文献は諸行無常説を再三にわたって説く。そして、部派仏教の中で最有力であった説一切有部のように、諸行無常説に論理的な説明を与えることに尽力した者たちもいた。これによって彼らが目指したのは、諸行無常説の根拠を示し、

それにより疑念なく修行に専念することだったと考えられる。諸行無常の根拠が示されることで、出家の修行者たちは無常なものを無常なものとして正しく認識することが可能となり、それにより、無常なものに執着することの過ちが理解され、最終的に無明を滅ぼすことができる、という考え方が彼らの思弁の背景にあつた。部派仏教が説く十二縁起説では、無常であるものを無常であると知らないことが無明と解釈されるが、世界が無常である根拠を知る智慧こそが、人間を煩惱の束縛から解放し、覺りに導くものであると初期の仏教徒たちは理解したのである。そして、この理性的に理解する諸行無常と連関する形で、初期仏教の修行には、無常を感得するための種々の瞑想・觀法が取り入れられている。例えばそれは、白骨觀、或いは骨鎖觀と言われているもので、死体が次第に腐敗して散り失せ、最後に白骨となるまでの姿を心中に觀想するといったものである。

しかし、このように宣揚された諸行無常説も、大乘仏教の体系の中では、空思想の陰に隠れることになる。初期の大乗經典である般若經系經典は空の思想を標榜し、それに基づく徹底した無執着、無所有こそが、積尊の覺りの境地であると説いた。諸行の無常性の理解は妄執の否定に資するが、無常なものであつても、その「有」を認めるならば、妄執の対象が依然として残ると般若經系經典は「有」を認める立場を批判する。この空思想の登場により、インド仏教は転換点を迎える。端的に言えば、諸行無常説ではなく、空思想こそが、仏説の核心であるという確信が仏教徒たち、とりわけ大乘仏教徒たちに生じたのである。この意識革命は、結果論として見れば、以降のインド仏教思想史の方向性、とりわけ大乘仏教教団の展開の方向性を決定付けたと考えられる。

部派仏教徒たちが諸行無常説に論理的説明を与えたように、大乘仏教の思想家たちも、空思想に論理的な説明を与えた。彼らは、空とは本質をもたないことであると解釈した。本質とは、或るものをそれ単独でそれとして成り立たせしめているもののことである。そして、彼らは、人が「有る」と考えているものの一切が本質を欠いていることを

説明するために、関係性の理論を説いた。ことばで表される概念を含め、あらゆるものは他との関係において成立しているのです。それ単独でそれとして成り立つことはあり得ない、ゆえに本質をもたず、空である、という理論である。

関係性の理論は、大乘仏教の社会的拡大という点で、重要な役割を果たしたと考えられる。例えば、大乘の衆生救済精神の背景にある煩惱即菩提、生死即涅槃といった考え方は、関係性の理論を背景にもつものである。更にこの理論は初期仏教には見られなかった世界観を生み出した。それは凡夫の常住性である。如来蔵を説く代表的な大乘經典で、四世紀以降の成立とされる『勝鬘經』では、仏が常住なる肉体と精神をもつことが説かれているが、その背景には関係性の理論がある。『勝鬘經』は、凡夫は、無常で、苦で、無我で、不浄なる存在であるが、凡夫と相即の関係にある仏は、常住で、楽で、永遠不変なる自我をもち、清浄な存在であると説く。更に進んで、同經は、実は、凡夫も、本性上は、常住で、楽で、永遠不変なる自我をもち、清らかであると主張する。さもないければ、凡夫が、無常を、苦を、無我を、そして不浄を厭い、従って涅槃を希求する、という事実が説明できない、という逆説的な説明を『勝鬘經』は与える。

仏が常住なる肉体や自我をもち、そして、我々凡夫も本性上、それと同様であるという考えは、部派仏教の諸行無常の世界観からは到底ありえない。部派仏教では、凡夫は勿論のこと、たとえ仏といえども肉体をもつ以上、諸行無常の真理からは逃れられず、死後、その肉体は灰となり、意識は消失すると説く。初期仏教の教理との対比で見れば、煩惱即菩提や、仏と凡夫の不二、常・楽・我・浄という考え方は、その背景にある深い哲学的洞察を離れ、その文字面だけを見るならば、極めて楽観的であり、仏教の教えを衆生に近しく安易なものにするという効果があったと思われる。それゆえ、こういった考えは、大乘仏教の布教、教団の拡大において、極めて有力な教理になったのでは

ないか。このように大乘仏教教団の拡大と発展を考えた場合、空思想の台頭、そして、それに伴う関係性の論理はその中心点に位置すると考えられる。

このようにして空思想の台頭により影を潜めた諸行無常説であるが、インドにおける宗教間論争が盛んになってくる四世紀後半から五世紀以降、思想史の表舞台に登場してくるようになる。それは、部派仏教のみならず、大乘仏教を含めた、仏教一般の世界観として、対外的な論争の場面で登場するのである。すなわち、グプタ朝が成立した四世紀以降、仏教徒と非仏教徒との間の論争が徐々に激化してゆくが、その中で、仏教徒が仏教の世界観を対外的に主張する際に標榜したのが諸行無常説であり、他方、外教徒が、仏教の世界観を否定する際、執拗に攻撃したのも他ならぬ諸行無常説だったのである。他方、空思想について言えば、それが宗教間論争の中心となることはあまりなかったと言つて良い。というのも、外教徒たちは空思想を虚無論と見なし、議論の中心とはしなかつたからである。空思想は、大乘の菩薩の救済精神を根底から基礎づけるものとして教団内部で脈々と受け継がれてきた宗教的理念だったが、対ヒンドゥー教、対ジャイナ教といった対外的な場面では、仏教全体を代表する世界観とは成り得えなかつたと考えられる。

興味深いことに、六世紀以降に活躍したとされる、大乘仏教の或る思想家の著作の中に、その大乘思想を否定する対論者の見解として、仏が常住であるというならば、それは三法印の一つである諸行無常説に抵触するので、もはや仏説とは言えない、という批判が現れる。この批判は、部派仏教徒による大乘批判と理解されるが、この批判には、仏常住説を仏教徒が認めるならば、仏教が仏教たりえなくなるといふ危機感が現れている。興味深いことに、この反論に対する回答として、当該の大乘の思想家は、仏の常住性は諸行無常説に抵触せず、諸行無常説の枠組みの中で解積できると主張する。その回答として、思想家は、仏そのものが永遠なのではなく、覺りの真理を明瞭に直観する、

仏の智慧が永遠なのだ、と述べる。更に彼は、仏は常住であるという場合の、「常に」という副詞は、瞬間的なものにも用いることができる、と主張する。それは、例えば、炎は一瞬一瞬形を変える瞬間的なものであるが、その炎に対して、炎は常に燃えている、と言うことができるようなものだ、と彼は述べている。説得力のある回答とは思えないが、ここで大乘の思想家が、仏の常住性と諸行無常説の折り合いをつけようとしているという事実は重要である。

実際のインド思想史を見れば、四世紀のグプタ朝以降、仏教はヒンドゥー化するバラモン教に対抗できなくなり、没落の一途を辿る。そして、さらに仏教に追い打ちをかけたのが、ヒンドゥー教の密教化である。この密教化の大きな流れに仏教も飲み込まれて行き、その後の仏教は、儀礼面、実践面でヒンドゥー教と自らを区別することが困難になっていく。こういった思想状況の中、中・後期から終末期にかけての仏教徒は、自らと外教徒を区別し、仏教の仏教としてのアイデンティティを確保する必要性に迫られたと考えられる。中・後期から終末期にかけての仏教では、儀礼面でのヒンドゥー教への同化と、教理面でのヒンドゥー教からの差別化という、非常に複雑な現象が起こっていたのである。そして、その教理面での差別化で重視されたのが諸行無常説だったと言えることができる。むしろ、諸行無常説以外に、もはや当時の仏教徒には、自らの宗教と外教を差別化するものは残されていなかったと言わなければならない。

この思想史上の事実は、我々が仏教という宗教の本質を考える際、大きな問いを投げかける。すなわち、宗教という人間の精神活動の本質を、死を免れない有限な我々人間の、無限なるものへの根源的欲求に見るならば、仏教はそもそも宗教であるのだろうか、或いは、宗教たり得るのであるのか、という問いである。永遠なるものを徹底して排除する諸行無常説を核心とする仏教は、宗教として最初から矛盾を孕んでいる、あるいは宗教として機能しないも

のであるとは言えないだろうか。部派仏教の説くところでは、釈尊でさえ諸行無常の真理からは逃れられず、入滅後、その肉体は灰となり、その意識は消失したとされる。その意味において、初期仏教が理解する仏教は、いわゆる「普通の宗教」からは一線を画したものであると言える。

一方、大乘仏教の救済論は、仏教という異様な宗教が、「普通の宗教」としてあるべき、宗教の道に行きついた当然の結果と見なせるだろう。大乘仏教運動は釈尊の死を克服することから始まったと理解する研究者は多い。そして、まさに大乘仏教は仏の永遠性を説いている。更にまた、大乘仏教の救済論が行き着くところまで行きついた如来蔵思想では、仏と凡夫の相即関係が主張される。本性上、我々と仏には如何なる違いもなく、我々もまた、常住なる存在、樂なる存在で、永遠不変なる自我をもち、清淨なる存在であるとするのである。

このような形で教団内部に大きな教理上の矛盾、あるいは断絶を孕みつつ、しかし、対外的には諸行無常説を唱え続けていく中で、インド仏教は終に一三世紀初頭に滅亡を経験する。釈尊在世時からの約一八〇〇年の歴史を閉じるのである。その中で繰り広げられた、無常と永遠をめぐるせめぎ合いの中に、仏教という宗教の本質を探るための手がかりがあるように思われる。